東洋経済

BUSINESS

ビジネス

創刊号

I

1957

ATOM原子力ATOM原子力ATOM原子力

れている発電用原子炉は、PWR型（加圧水型。原子炉の燃料で発生した熱を加圧水でとり出し、この高温加圧水で別の水を沸かして蒸気をつくり発電するもの）とBWR型（沸騰水型。原子炉で直接水を沸騰させ、それで直接発電するもの）の二つであるが、PWRはウェスチングハウス電機会社、BWRはゼネラル・エレクトリック（GE）会社のそれぞれ縄張りになっている。この二つの型の売込み人が相ついで日本を訪れてきた。

BWRの方はGEのコンサルタントであるエバコス社のライクリー氏というのがきたし、PWRの方は同じくウェスチングハウスの顧問ニコルズ氏というわけだ。ニコルズ氏は、つい先年オッペンハイマー博士追放の主謀者で、当時アメリカAEC（原子力委員会）の事務総長をつとめた人、この人が今度は平和の特使としてやってきたのである。

こういう人々は、まず原子力産業会議で一席演説した後、色気のありそうな会社を巡回するのが常だ。しかし話をきく方も行儀よく聞いている奴ばかりではなかろう。

「先月きたL氏はBWRが最もやすいといったが、どうでしょうか」とPWRのN氏にかまをかけた会社がいくつかあったとしてもおかしくはない。そこでむきになってはだめだと自制しながらも、そこはやはりセールスマン、「いやLですか。あれは、私がAECにいたときの下ッ端役人でして……」という言葉がとびだすという始末。一体、PWRが安いのかBWRが安いのか、話はますますわからなくなっていく。

このような戦国時代の原子力では、日本の原子力委員長の椅子に妖気がのりうつるのも無理はないというものだ。今年早々原子力委員長がかわり、宇田耕一氏が就任した。宇田氏なら正力氏ほど馬車馬ではないから、日本の原子力も今年はしばしの朝寝が味わえようと思われたのも束の間、たちまち宇田委員長は、「昭和四十年までの電力不足分千万キロワットのうち、三百万キロワットは原子力でやる。『英の米の』といわずに原子炉も二―三十基は買う」と放言して、けんけんごうごう。これにはいい加減馬力のある石川一郎氏すら、「聞きちがいだろう」といったという。

これがきっかけとなって、東京電力、九州電力では原子力発電所計画を発表するし、電源開発会社でも、「採算のとれない間は俺が本家」と横ヤリを入れる。民間電力事業の集りである電気事業連合会でも、昭和四十年までに九十五万キロ、昭和五十五年までに千万キロという、少し遠慮した計画を出す。

先のコールダーホール型は、やはり入れようという考えの人が多くなってきて、今年中にもう一度調査団を出す予定になったが、コールダー型のようないかつい炉が果して日本のような地震国でそのまま使えるか、というやや盲点をついた問題が台頭してきて、今度はそういう耐震試験で一騒動おきそうな形勢だ。

九つの民間電力会社と国家資金でまかなう電源開発会社との対立は、原子力以前のかなり根深いものがある。例の送電線もそうだが、この論争は経済家にとっても興味深いテーマだろう。

☆――原子力はもうからない――☆

ここにちょっと面白い世論調査がある。それはアメリカの原子力産業会議が行ったもので、四百二十七の団体（会社、研究所、大学、大部分はメーカー、電力会社など）に次の質問状を発し、団体としての意見を徴したものだ。

「原子力産業の成長と開発を妨げているものは何か」

その回答にはちょっと考えさせられるものがある。というのは、身につまされるものがあるし、なるほどと思わせるものもあるからだ。まず回答の第一位は、

㈠「経済的な刺激の不足」（つまり原子力はもうからない）

というのである。アメリカの産業家はなかなか正直と知って安心もするし、なるほど、だから売込みもすごいのだなと納得もする。

次に

㈡「原子力の保険または損害補償措置がないこと」

とある。原子力発電所は火力発電所とちがって、もしなんらかの事故がおきた場合には、放射能を四囲に発散して莫大な損害がおきる可能性がある。原子炉技術などの進歩によってそういう可能性は少なくなりつつあるのだが、まだ、保険業者がそういった危険を引き受けるまでにはなっていないし政府の補償政策もはっきりしていないのは困るという言い分である。放射能にたいして心配しているのは何も日本国民だけではないことを知って心強い。第三位以下は、

㈢「秘密および機密政策」

㈣「人員不足」

㈤「政府の政策実施の欠陥」

ところで、回答をわけて電力会社からきた回答を集計してみるとちょっと特色がある。すなわち第一位は「資本費が高いこと」という比較的常識的なものだが、すぐ第二位には、

「公共電力か民間電力かの論争の影響」

という。つまり、原子力発電を国家資本でやるべきであるか、民間資本でいくべきかという論争に結論がでていないのは、まずいというのだ。

日本の原子力論争もまた、なかなか世界水準ではある。

ATOM原子力ATOM原子力ATOM原子力ATOM原子力ATOM原子力ATOM原子力AT